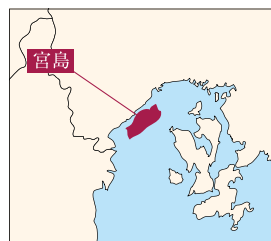




訪れたいまち

はつかいち

広島県廿日市市宮島



安芸の宮島は、松島(宮城県)、天橋立(京都府)と並ぶ、言わずと知れた日本三景の一つ。紺碧の海に浮かぶ朱色の大鳥居や美しい厳島神社が容易に思い浮かぶ「神の島」。そんな宮島に、ここ数年、新たに注目を浴びるスポットがあると聞き、訪れてみました。



「宮島の宝物を皆さんへ伝えたいんですよ。せっかくあるのに、もったいないけん」

開口一番、このような答えが返ってきた。「宮島の宝物」とは、厳島神社はもちろんのこと、神社の歴史と密接なかかわりを持つ寺院や遺跡、加えて町民文化の足跡であるという。

宮島を愛する「宮島人」たちは、昭和に入ってからからの観光形態の変化により、人が賑やかな表参道に流れ、昔からの生活が詰まった宮島の原風景、例えば小路一つでも、存在が忘れ去られてしまうことをずっと危惧していた。

この想いを形にしたものが「宮島の案内絵図」として、平成13年に誕生した。旧宮島町と観光協会が主体となって発行したのだが、宮島を良くしたい、元気にしていきたいと願う人々が力を合わせ、より歩きやすく、より親しみやすく、詳細に町内の様子を描き込んでいった。

「町家通り」「山辺の古径」など、今こそ観光客にも広く認識され、愛着



古来より神の島として崇められ、世界文化遺産にも登録(平成8年)された厳島神社を擁する宮島。観光客も年々増加し、ついに年間340万人を超えるなど、日本有数の観光地として着々と成長している。そんな宮島で新たに注目されるスポット、それが「町家通り」だ。

現在、宮島には、海岸通り、表参道商店街、町家通りと大きく分けて三本の通りがある。この街並みは、江戸時代からの埋め立てにより順を追って造られてきたそうだ。表参道には、沢山の土産物屋が建ち並び、観光客も多いが、江戸の初期、この地はまだ海であり、「町家通り」が中心地として賑わいをみせていたという。この頃の「町家」と呼ばれる住まいが、今なお現存され、情緒ある街並みを形成しているのだが、古からの歴史ある通りが、なぜ今になって俄然注目を浴びるようになったのか、そのきっかけを、宮島観光協会専務理事の浜田さんと広報課長船附さんに伺ってみた。

を込めて呼ばれている通りの名前も、実はこの時に名付けられたという。例えば「表参道」に対して漠然と「裏通り」としか呼ばれていなかったものを「町家通り」として位置づけ、随所に美しいレリーフやあんどんを付けていく。何気ない日常に、様々な仕掛けを埋め込んでいくと、住民の意識も変わる。日常の生活の場所、それ自体の存在意義が見直され、誇りと自信が増していく。

この時のレリーフの一つひとつを、作り上げたという藤井さんのお話を伺うことができた。「昭和の観光もいいけれども宮島にはもっと違う見せ方もあるのです。ここに住まう人が、宮島のために何かできないか。この取り組みから我々の気持ちに、一層強いつながりが生まれました」

穏やかな口調だが、町の再生を志し、一步一步実績を積み重ねてきた自信が伺える。

想いはどんどん連鎖していく。

時代の流れとともに失われかけていく町家を保存し、再生していこうという機運も高まっていた。町家の建築様式やその文化を後世に遺したいという人々の熱心な活動によって、宮島の街並みは支えられている。

「宮島にあるすべてが宝物じゃけん。石ころさえも、松の木一本でさえも、愛おしくてならないんよ。ほいじゃけんこれからも、ずっと宮島を元気にしていくから。楽しみにしときんさいね」

船附さんの言葉が胸に響く。こうした人々の熱い想いによって、宮島はどんどん輝きを増している。

これからも、まだまだ眠っている宮島の宝物が発掘されていくのだろう。しかし、なによりも、大切な宝がある。それは、これほどまでに宮島を愛する住民自身の心意気。これこそが今回見つけた最高の宝物であった。

小路一つひとつが宮島の人にとっての大切な宝物。古の由来があるものはそれを活かし、また、子供の頃の思い出や愛着を込めた名前のレリーフを付けていった。



小路にあるレリーフを作成した工芸作家の藤井克則さん。各家の軒下にアーティストの作品を飾る「軒下アート」を企画するなど着々と活動を続けている。柔和な語り口だが、宮島を愛する強い想いが伺える。「これからも宮島の宝物を発信していきたい」。

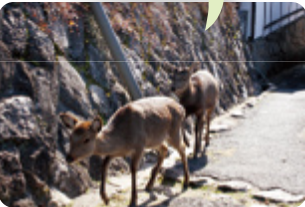


「ぎゃらりい宮郷」のオーナーご夫妻。宮島杓子の間屋だった面影を随所に残しながらギャラリーとして再生した。町の人々の憩いの場となるとともに、外部の芸術家の拠点ともなっている。美術の造詣が深い宮郷さんご夫妻の温かい人柄に惹かれてリピートする観光客も多い。



「町家ホテル菊がわ」の菊川照将さん。失われていく町家に対して危機感を抱き保存活動に取り組んでいる。町家建築に対して高い美意識、こだわりを持つ。こんな菊川さんを頼って外部から移り住み、町家再生に取り組む若者もいる。「想いと空間があれば人は寄り添うようになります」。

「山辺の古径」は巖島神社への最古の参拝道とも言われる。古来よりの宮島の歴史を語る上で欠かせない古径。緑豊かなのどかな道の途中には、乳地蔵や張子工房など味わいのある見所が点在している。鹿もんのんびりお散歩。



文具・雑貨店「古色ささき」を営んでいる「ももちゃん」こと佐々木百代さん。優しいまなざしで、宮島の人々を見守っている。小学生の時から、お世話になっている人も多しとか。変わらない生活を守り続ける、町家通りの看板娘。



魅力ある観光地として

国土交通省は、自然、歴史、文化等において密接な関係のある観光地同士が連携し、2泊3日以上滞る型観光に対応出来るよう魅力を高めようとする区域を観光圏として認定しています。今回の宮島は、「広島・宮島・岩国地域観光圏」として、平成20年に認定されています。

<http://www.mlit.go.jp/kankochi/shisaku/kankochi/seibi.html>

廿日市市ホームページ
<http://www.city.hatsukaichi.hiroshima.jp/>
 宮島観光協会ホームページ
<http://www.miyajima.or.jp/>



新たな町おこしのきっかけとなった「宮島の案内絵図」。裏面には「みやじま自然散策マップ」も載っている。※宮島観光協会案内所にあります。